



大場義樹 教授 1932 (昭和7年)～2014 (平成26年)

### 大場義樹氏を偲んで

2014年9月、大場義樹氏が亡くなられた。体調万全というわけではないことは知っていたが、訃報が届く10日ほど前にお会いしていたので、私にとって急な知らせであった。

金沢大学名誉教授であった大場氏は、理事そして大会会頭として本会に貢献された方である。大場氏と私には太いつながりがあるため、ここに追悼文を記させてもらっている。

大場氏は、30年間にわたって金沢大学の教授(薬学部)を務められ、その間にクロマチンの構造と機能についての研究に取り組んだ。今でこそ、ヒストンの化学修飾が遺伝子転写調節に重要な役割を果たすことが知られているが、大場氏がクロマチンの研究を始めた頃は実験手法がかいもく見当のつかない時代であったと思われる。その意味で、大場氏は日本におけるクロマチン研究の草分けの一人である。大場氏の大学運営への貢献も大きく、二つの期間に渡り薬学部長を務め、定年退職前の数年間は学生部長の職にあった。

大場さんは組織を作り出すことが好きであった。私が金沢大学に着任した時、既に20年近く教授を務めていた大場さんは、学内外で大きな存在であった。本会の北陸支部は大場さんにより動かされていたといっても過言ではなく、また「金沢生物科学倶楽部」という北陸地区の大学や企業の関係者が人脈を作ることを目的とした会を、大場さんが運営していた。1980年代中頃から1990年代まで続いた「朝霧シンポジウム」という名称の学術集会を覚えている方はいるだろうか。この会は、石浜明氏(当時、国立遺伝学研究所)、村松正實氏(当時、東京大学)、そして大場さんという、さまざまな場面で影響力を発揮する3人の教授が世話役となって運営されていた。彼らの共通の研究領域であった遺伝子転写に関する研究発表を中心として、毎年夏に、富士山麓の朝霧高原に位置する持田製薬の保養所「牧心寮」において2泊3日の合宿が行われた。朝から深夜まで、無礼講そのままの討論と飲食と歌や踊りが続けられた。石浜氏はあくまで科学を追求し、村松氏は大所高所から若者を励まし、大場氏は酒を片手に皆に意見する、世話人3人の特徴が絶妙に融和されたほんとうに楽しい会であった。朝霧シンポジウムに参加した学生や研究者になったばかりの人の中には、今では学界で中心的な役割を演じている人がたくさんいる。

大場さんは来客をもてなすことも好きであった。大場さんが会頭となった1997年の大会では、私は企画と実施のお手伝いをした。金沢で開催される大会はしばらくぶりであったことから、地元らしさを存分に表すよう大場さんから指示された。懇親会には加賀料理のふんだんな食事と金沢の伝統工芸の披露が盛り込まれ、市内繁華街にあるほぼすべての飲食店の入口には“歓迎、日本生化学会大会様”の紙が貼られた。

大場さんは洒落な人であった。フランスと英国で過ごしたことも影響しているだろうが、彼が生まれ持ったところが大きいと思う。大学近くにあるお住まいは、縦縞の色鮮やかな日よけを持つしゃれた家である。教授室ではパイプをくゆらせ、教室員とのよもやま話に花を咲かせた。定年退職の会では、「ヘチマの実 太いがふらり 食へもせず」の句で終わ

る、大場さんの人生と 생각이記された本が参加者に配られた。大場さんの著書の一つに『クロマチン』(UPバイオロジー61, 東京大学出版会, 1986年)があり、この本は“苦勞待ちのクロマチン”と“いずれこの身は死すともヒストン”のことで閉じられている。

本会大会が地方の大学キャンパスで実施されることはなくなり、大学での学部運営はすっかり民主化され、国による規制と大学教員の多忙のため飲み食いを伴う学術集会は姿を消していった。私にとって、大場氏の死去は古き良き時代の終焉を意味する。

謹んで、ご冥福をお祈りしたい。

金沢大学医薬保健研究域薬学系 中西 義信

#### 大場義樹（おおば よしき）先生ご略歴

1932年	北海道に生まれる	1967年	英国ポーツマス工科大学に勤務
1957年	東京大学医学部薬学科を卒業	1968年	東京大学助教授（薬学部）に昇任
1959年	厚生省予防衛生研究所に勤務	1968年	金沢大学教授（薬学部）に着任
1964年	東京大学助手（薬学部）に着任	1998年	金沢大学定年退職
1965年	フランス原子力研究所へ留学	2014年	死去、享年81歳